ＪＯＦＩ東京通信

第９号　2021（令和 3）年１月８日発行
https://jofi-tokyo.org/

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌

目次

コロナ禍を振り返って 1
会長　鈴木　伸一

沼津のご当地釣法サーベルテンヤ　基本的な釣り方と釣行記 2
藤倉　聡

ヤマメ発眼卵放流活動記録と感想 4
菅野　健二

私と釣りとの出会い 5
藤倉　佳代

はじめて活動に参加して 6
林　健二

コロナ禍での釣り 6
新井　勝之

思い出の Bohemian 7
粕谷　正光

ドリフトボートフィッシング 10
小松澤　誠一

内水面漁場管理委員を務めてみて 11
石井　利明

期待する釣りインストラクター像 12
会長　鈴木　伸一

2020 年度活動実績 13

編集後記 13

コロナ禍を振り返って

会長　鈴木　伸一

今年は年明け早々から新型コロナウイルスに振り回され続けた１年であった。

１ 月に予定していたパシフィコ横浜で開催された釣りフェスティバル 2020 、若洲海浜公園釣り場クリーンナップ作戦だけは何とか実施できたものの、その後の活動はほとんど中止せざるを得ない状況で、定時総会ですらJOFI 東京が設立されてから初めての書面評決で切り抜けた。

また、JOFI 東京では、役員同士、会員相互の連絡手段の電子化が遅れており、未だに紙に頼っている部分も多い。

特に今年度入会していただいた方に対しては十分な連絡が取れず、申し訳ないと思いつつも満足な活動はしていただけなかった。

我々の活動は釣り人あって、釣り場近辺の地域住民あって、釣り場をとりまく自然（環境）あってのものであり、とてもテレワークとはいかないものかもしれないが、早急に会議、連絡手段に関しては考えていかねばならないと思う。

幸い釣りそのものは大自然の中での行うもので、基本的な対策を取りさえすれば 3 密とも無縁と言うこともあって、釣り具業界はこのところ好調と聞いている。

そのせいか、釣りのルールやマナーを知らずに釣りを始めてしまった方も急増しているのではないだろうか？

最近、釣り場にゴミを放置したり、他の釣り人や漁業者とトラブルを起こす例を良く耳にするようになってしまった。

急場をしのぐためだけのものかもしれないが、釣り人が増えたということは、潜在的な釣り人口はまんざらではないということであろう。

我々の活動も、従来のやり方を踏襲するだけでなく、時代に応じたものにシフトしていくこともときには必要なことではないだろうか。

話しは変わるが、個人的には時間が空きさえすれば今年は積極的に釣り（フライ・フィッシング）に出掛けた。

もちろん、新型コロナウイルス感染症の感染防止策を十分施しての上である。極力他県を跨ぐことはせず、公共交通機関も利用せず、ただひたすら自転車を漕

いでの釣りである。
これは年明けに発症した坐骨神経痛のリハビリも兼ねているが、将来近場でも釣りができるようにと、釣りのターゲットをサケ・マスなどのアブラビレ族からコイ科魚族へシフトさせていく意味も込めてのことである。

今年のターゲットは何と言ってもオイカワ。
オイカワは河川の上流部から少々水質が悪化した中流部まで幅広く生息しており、その生息数もサケ・マスと異なりけた違いに多い。それに、小型の割に小気味良い引きも堪らない。フライを選ばないおおらかさに不満がない訳でもないが、オイカワ・フィッシング、なかなか捨てたものではない。

そうそう、コイもマルタ、アユの産卵時期にその気になって狙ってみた。
食性が分かってしまえばこちらのもので、・・・・・

沼津のご当地釣法サーベルテンヤ 基本的な釣り方と釣行記

藤倉 聡

今年は東京湾でテンヤでのタチウオ釣りが大ブレーク。しかし近年私は沼津での釣りが多いせいかテンヤを使用したタチウオ釣りと聞くと真っ先にサーベルテンヤでの釣りが頭に浮かんでしまう。手軽なタックルで簡単に釣れるサーベルテンヤでのタチウオ釣りをご紹介したい。

サーベルテンヤとは
釣り具の「イシグロ」が発案した沼津発祥の釣り方。エサ釣りとルアー釣りのハイブリット釣法とも呼ばれている。

タックル
ロッド：一つテンヤやタイラバ用のロッド又は 2m 前後のキス竿等でも代用可能。
リール：小型両軸リールまたは小型スピニングリール。

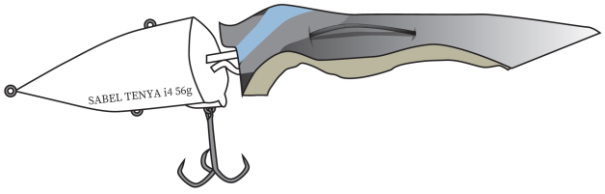
仕掛け
基本的には、マダイの一つテンヤ釣法のリーダー部分を太くしてテンヤをサーベルテンヤに付替えた感じで OK だ。

テンヤ
現在 2 代目サーベルテンヤi4と 3 代目サーベルテンヤ Evo が主に使用されている。
テンヤの重さは沼津では 30 グラム又は 56 グラムのサーベルテンヤを水深や潮の流れによって選択する。56 グラムのテンヤだと号数換算で約 15 号。東京湾のキス釣りなどに使用される重さとほぼ同じだ。
カラーのベースとなるのがフルグロー。これにホロパープルやホロピンクなど複数のカラーを持参すれば心強い。
魚の活性によりアシストフックを外したり、あるいはマックスシャフトを加えたり色々試してみるのも面白い。

エサ
エサはサンマの切身をメインにサバやイワシの切り身なども使用する事がある。

エサの付け方
1. 皮から差したら次は身から差す（縫い刺し）
2. 反転させて止め具あるいはクロスホールドシステムに挟み込む。
3. 仕上げに皮にもう一度差して完了。

ポイントは真っすぐにしっかり付ける事！



えさの付け方（サーベルテンヤ i4・さんま切身）

釣り方

基本的な釣り方は船長の合図で仕掛けを投入したら指示棚の 10 メートル手前位からテンションを掛けながらゆっくりと落としていく。このフォールでのアタリを取ることに集中したい。

この時のアタリを見逃すと PE ラインを切られてしまい、特にタチウオの活性が高いときはテンヤがいくつあっても足りなくなるので気を付けたい。

指示棚まで落としたらしゃくりあげるように竿をあおり、リールを巻きながら竿を水平に戻し仕掛けが馴染むまでステイ。数秒待ってアタリがなければ繰り返し上へ上へと誘っていく。

ジギングのようなハーフピッチ又はワンピッチジャーク等も有効。その日のタチウオの活性に合わせたリズムで誘いあげたい。

キャストしてカーブフォールさせる釣り方もかなり有効だが、その場合タックルはスピンニングリールがお勧めだ。

フォール中の当たりは即合わせで良いがそれ以外はしっかり食い込むまで待ちたい。

取込みは抜上げた時に魚が外れるとフックが宙を舞って危険なので、必ずリーダーを掴んで行う事。

釣行記

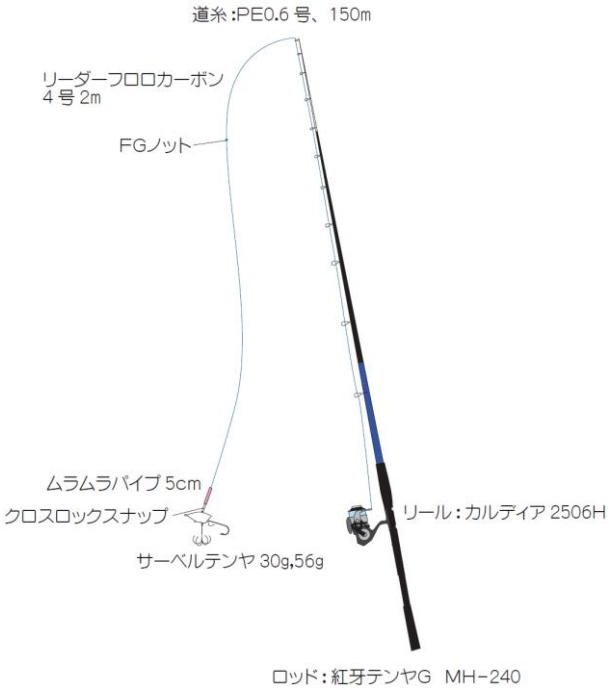
2019 年 11 月。妻と沼津の戸田にある「たか丸」より乗船。

17 時出船。係留船のお客を渡してからポイントへ。

たか丸は係留船も保有しているので根強いファンも多い。

乗合船の釣り人は私達 2 人だけ。3 連休に大名釣りとは関東近郊の船宿ではあまりない事なので貴重な経験となった。

当日のタックル＆仕掛け



右舷はロープがあり釣りが出来ないので私は左舷大艫、妻は私の隣の席を確保。

17 時半前にはポイントに到着。タックルの準備が出来ていないので焦る。

妻に釣り方をレクチャーしてから自分の仕掛けを準備していると、妻が「きたー！？」と言ってリールを巻きだす。海面に姿を現したのはなんと！本命のタチウオ！！！

第 1 投目から本命ゲット。私のレクチャーが良かったのかな！？

私も準備が出来たのでスタート。「自分にもキター♪」と思ったらカマス。

その後ドラゴン級の大型タチウオのバラシ等もありなかなか釣れなかったけど、遂に本命ゲット！いつでも最初の 1 匹目は嬉しい。
でもこの時点で妻に 4 匹リードされている。
同時ヒット等もあり楽しさ MAX。妻は「ハゼ釣りより簡単」と豪語していた。
しかしタチウオの活性が高まり PE ラインを何度もブチブチ切られ戦意喪失気味になる。フォールの辺りを見逃すと切られることが増えるのでまだまだ未熟と痛感させられた。
20 時半過ぎキャストして釣りだすとカーブフォールが効いたのか、これが大正解で入れ食いモードに突入。
エサはサンマとサバの切身を使用。サンマの切身をメインに使用したがこれだけ活性が高いとサバの切身でもアタリの頻度は変わらない。むしろサバの方が身がしっかりしていてエサ付けしやすくて良かった。
22 時半に沖上がり。

ポイント：釣れないとテンヤのカラーを変えたくなってしまうかもしれないがその前に、棚の再確認、エサが真っすぐに付いているか？誘いのリズムがあっているか？などもう一度確認したい。

釣果発表
私の釣果はタチウオ 13 匹とカマスとフグ
妻はタチウオ 9 匹と巻き上げ途中で半分食べられてしまったタチウオ 0.5 匹で 9.5 匹

よって、乗合船で人生初の竿頭達成！！！
やったー♪おめでとう！わたくし♪
小学生の頃、鮒釣大会少年の部で優勝してトロフィー貰った時の事を思い出した。
その日も参加者は私とその友人の二人だけだった･･･。

23 時頃妻の実家に向けて出発。
車中、妻に「沼津の釣りと言えば夜釣りのタチウオとクロダイが有名」と話すと「私はタチウオを極めようかな♪」と言っていた。
実家に到着したのは 0 時丁度。
妻とエビスビールで乾杯！

是非サーベルテンヤで沼津の夜タチウオ釣りにチャレンジして頂きたい。
きっとその魅力にハマるはず！

ヤマメ発眼卵放流活動記録と感想

菅野 健二

11 月 7 日朝、集合場所となった駅の前にはポツポツと登山客が集まり始めている。
天候は穏やかで、空気は澄んでいる。
ヤマメ発眼卵の放流場所は奥多摩の先の小菅方面である。
車は徐々に深くなる山を登っていく。
車を止めると今度は歩きだ。ここからは道なき道を発眼卵 BOX を抱えて川へ降りていくことになる。

山は静かで、やがて清流のすがすがしい音が近づいてくると、自分が釣りインストラクターの活動をしていることを実感する。
10 分ほど歩くと少しひらけた、発眼卵 BOX の設置場所に到着する。
大きい岩が点在している。中でも巨大な岩はボルダリングに挑戦しに来る人もいるようだ。
川の最深部はおよそ腰が浸かるぐらいだろうか。
水温を記録し、発眼卵 BOX の組み立てを始める。

そして、発眼卵の入った BOX を川底に沈める。
刻一刻と変化する水の流れに負けないようにロープと、こぶし大の石で回りを固めて BOX を固定するのだ。
流されることなく仕事をしてくれよ、と思いを込めながら川に腕を突っ込み石を積み上げていく。

発眼卵 BOX には無数の隙間があり、そこから孵った稚魚が川に放たれる。
そして、その稚魚たちがまた自然を作り上げていくのだ。

2020 年、新型コロナウイルスの影響があったのは人の密集する都心部だけではない。
緊急事態宣言を前後して、余暇で遠方へ行くのを避けた都民や近県の観光客はいつもより奥多摩に集中することになった。
その結果、一時期、奥多摩の街は多発する渋滞や路上駐車の問題を抱えることとなる。

奥多摩地方も混乱していたようだ。
その中にあっても山、川は淡々と自然の営みを続ける。
来年も、あるいは再来年も奥多摩に来ればいつもと同じように、厳しく、美しい自然がそこにあるように、そのサイクルに一部でも携わっている者として活動の手を止めてはいけない。
そこに私たち釣りインストラクターの活動の重要性と意義があるのではないかと感じることができた。

私と釣りとの出会い

藤倉 佳代

初めて釣りに行ったのは、7 年程前、釣りが趣味の主人がハゼ釣りに近所の運河に行くというので一緒についていったことだったかなと思い返しています。
当時は全く興味がなかったのですが、ひとりで家にいるのもつまらなかったので、なんとなくついていった記憶があります。
はじめは本当に釣れるのかなと半信半疑で見ていましたが、やってみる？といわれ、竿も仕掛けもえさの青イソメも全部準備してもらっていざ竿を投入し、教わった通り、おもりが下についたのを確認して待つものの、まったく釣れるという感じかありませんでした。
しばらく経って、手先がぶるぶるっとした感覚があったので、恐る恐る竿を上げてみると
そこには小さなハゼがかかっていました。
これが釣れる感覚なのかなと思い、その後もぶるっと来たタイミングで竿を上げるとまたかかっている、ド素人の私でも釣れるんだ！と段々面白くなってきました。

その後も何匹か釣り上げ、主人がてんぷらがうまいんだと言って料理してくれて（ここまで私は全く何もしてませんが・・・）いただきましたが、白身が上品でとてもおいしい、自分で釣った魚を食すのも釣り人の特権かなと思いました。

その後も夏前に１回、夏の終わりに１回ハゼ釣りに行くのが毎年のルーティンになっていますが、最初はえさの青イソメを触るのにかなり抵抗があり、しばらくは主人につけてもらっていましたが、今では自分で針先につけることができるようになり、（さすがに胴体を引きちぎるのはできないのではさみで切っていますが）最近では仕掛けを用意してもらったら自分でえさつけて、釣れたら針から取って、またえさつけて投入の流れが自分ひとりでできるようになってきました。
釣った後は、てんぷらを塩でシンプルに、また魯山人風に大根おろしと醤油で、多かったら主人がまた南蛮漬けにしてくれたりと、数日美味なハゼを楽しんでいます。
主人がよく江戸前のハゼは今や釣らなきゃ食べることができないと言っていますが、まさにその通りで、お金を出せば買って食することができるおいしい魚は沢山ありますが、釣らなければ食することができないハゼ釣りは、ある意味贅沢なのかなと感じています。

最近は主人と私の実家の沼津に帰省して、ひとり暮らしの父親の様子を見にいきつつ、手漕ぎボートで近所の駿河湾に繰り出し、サバやイナダ、先日はクロダイを釣り上げるまで、上達しました。

上達というよりは場所がよいのだと思いますが・・・・
ウエアや小道具も地元の釣具屋でメーカーのものをそろえ、今では一端のアングラーになってるかな？と感じています。
大海原に出れば、ちっぽけな自分の存在に気づかされ、些細な悩みなんて吹っ飛びますね。
何も釣れなくてもただ竿を出してぼーっと海を眺めているだけでも癒されます。
釣りという素敵な趣味を共有させてくれた主人に感謝し、老後も二人で釣りができるように健康第一で、これからも楽しんでいきたいと思っています。

はじめて活動に参加して

林 健二

はじめまして林健二と申します。本年 2020 年より JOFI 東京に入会させていただきました。

これまで長い間、自然の中で釣りを楽しんできたのですが、この自然を守る事、自然の良さ・楽しさを伝えることができると良いなと思うようになり、また、釣りをしているときに周りの親子連れで釣りを楽しんでいる姿を見て、このような楽しさを人に伝えられるようになりたいと思い、釣りインストラクターにチャレンジしてみました。

もともと東京出身で、ずっと東京を起点にフライフィッシングを中心に釣りを楽しんできましたが、仕事の都合で昨年まで三年間、秋田での生活を経験してきました。
秋田行きが決まった時、東京を出る不安よりも先に頭に浮かんだのが釣りキチ三平の故郷であること。自然豊かな中での生活を夢見ていた私としては願ってもないチャンスでした。
空港に描かれた三平くんのモチーフ、路線バスの座席に描かれた三平くん、秋田は私が思った以上に三平くんの故郷でした。
秋田では市内から 15 分で秋田港での釣りができ、山の方に向かえば 30 分程度で行ける渓流があり、まさに「ちょっと釣りに行ってくる」ことが実現できる、東京出身の私には夢のような世界でした。また南北に 2 時間以内で“渋滞に合うこともなく”、素晴らしい自然に囲まれた中で釣りを楽しむことができ、赴任期間中あちらこちらに出向いておりました。
自然が近いことで子供にも良い経験をさせることができ、近くの秋田港や男鹿半島でのサビキ釣りではアジや小ダイがたくさん釣れ（このおかげで釣りは楽しい、とのイメージがついてます）、またサケの稚魚放流にも気軽に参加することができて、家族共々たくさんの経験をすることができました。

さて今年、会員になってから初めて、11 月 7 日に行われた JOFI 西東京さんのヤマメ発眼卵の埋設活動に参加さしていただきました。

全てが初めての経験の中、開会式のご挨拶の中で「生命をあずかってる」という言葉を聞き、身が引き締まる思いで一日がスタートしました。また、発眼卵を埋設した釣り場を内緒にしてしまうのではなく、たくさんの人に素晴らしい自然を知ってもらうために広めてほしいとのお話もうかがい、とても新鮮な気持ちでした。
手足や埋設する道具の消毒、孵化後の稚魚が流されないような設置場所の選定、発眼卵を入れた箱も増水対策、太陽光対策用に石を乗せ、ロープでくくり、といろいろな作業があることを学びました。

禁漁後の渓流に入ることは今までに経験がなく、秋の紅葉の中での流れは、いつもと違った静かな気持ちで川を見ることができました。来春の発眼卵 BOX 回収と稚魚放流の活動もぜひ参加したいと思っており、その他の活動にも積極的に参加させていただきたいと思っております。

皆様、ご指導の程、何卒よろしくお願いいたします。

コロナ禍での釣り

新井 勝之

今年はコロナ禍に始まり、コロナ過に終わろうとしています。そんな中でも釣りが出来た事と JOFI 東京の活動事業が、少ないですが、行えた事は喜ばしい事でした。

先ず、緊急事態宣言（2020 年 4 月 7 日～5 月 26 日）が発令されたことで、JOFI 東京の事では、年度替わりに行われていた総会が中止になり、書面での決議変更で、文書作りに追われ、決議案の賛否の集計等々に苦労しました。
また、若洲の釣り施設の閉鎖に伴い、毎月第二土曜日の清掃活動も中止、もちろんイベントでの活動も無く、今年度の活動はゼロになるのでは？の思いを痛切に感じましたし、会員の方からも同じ意見が出ていました。
解除後、人混みや、多人数での行動自粛、移動等の

制限を考慮しなければならないし、東京は感染者が多く、他府県への移動も自粛で、ストレスが溜まりがちでした。
そんな中、徐々に緩和されて、若洲での清掃活動も 7 月 11 日から開催しましたが、沖に伸びる堤防では前年の台風による被害で閉鎖されたままだし、足場が良い柵がある釣り場は 2m 間隔にあけるようにロープが張られ、制限がされていたため、足場の悪い磯場の釣り場に人が流れ、素人同然には不向きなので事故への危惧を感じました。遠くに行けないし、野外活動に飢えた人々で溢れているようでした。施設管理者の方で清掃しているのでゴミは少ないと言っていましたが、人が多いので、相変わらず釣り具関連のごみが多いし、食べ物の容器なども多い状況でした。それ以後、その傾向は毎回同じでした。

11 月 7 日は、JOFI 西東京に協力参加で「ヤマメ発眼卵埋設」に鈴木会長他 5 名が参加され、無事活動事業が行われ安堵しました。いろいろな活動事業が中止になり、少しでも出来たことは喜ばしい事です。ここに来て感染者が増えているので今後の活動に影響しなければ良いと思う日々です。

私自身の釣りは、3 月の終わりころに養沢毛ばり釣り場に出向生き、今期初のフライフィッシングが出来た事で、釣りが出来ることへの喜びを感じました。

その後は、7 月 23 日に海釣り友人と「タコ、キス釣り」のリレー船で、久しぶりの潮風を浴びての沖釣りで、タコ、キスをゲットし、家で鮮魚を味わいました。
9 月には S さんに誘われ、奥日光の大尻沼でのボートでのフライフィッシングでニジマスを狙いましたが、掛かったものの針が外れ、おでこで終わりました。
前日に赤城山麓の管理釣り場では、ほとんどのドライフライに魚が掛かり、久々のいい思いをしました。

10 月も S さんの誘いで、養沢毛ばり釣り場の今季閉鎖前の釣りに行きました。流芯付近からニジマスがドライフライに掛かり、楽しめました。
10 月の終わりには道東に行きましたが前日の大雨で悲惨な目に合い、ただの観光旅行に近い思いでした。
今後の予定は、12 月にヒラメ釣りを鹿島の釣り船で行こうと思いましたが、11 月 28 日に釣り船と貨物船との衝突で、1 人が亡くなり、2 人が怪我をする事故が有り、また、コロナの感染拡大も考慮して、近場での釣りを考慮中です。遊漁船の事故は痛切に感じます、亡くなられた方に「心からご冥福をお祈り申し上げます」

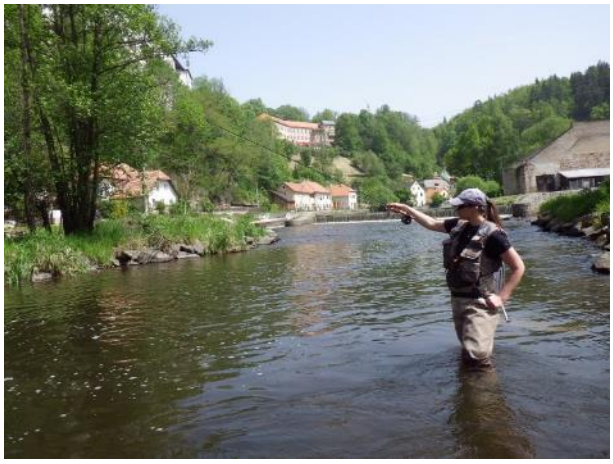
思い出の Bohemian

粕谷 正光

今年（2020 年）のフライフィッシング世界大会（マスターの部＝50 歳以上）はチェコ で行われるはずでしたが、昨年末から始まった新型コロナウイルスの猛威で越年となってしまいました。
地域は違うけれど、6 年前にボヘミアで行われたシニア大会を思いだしてみました。

ANA NH203 便で、フランクフルトには現地時間の 6:05 分到着。12 時間 10 分のフライトです。
入国手続きをして、ここからは国内線扱い。2 時間 50 分待ちでオーストリアのリンツへは 10:00 到着。
予め予約して於いたお迎えは、私の名を記したカードを手にした若いお嬢様。リンツから車で北上し、国境を越えて目的地に到着。
先乗りしていたキャプテンの石村さんから情報をもらい、すでに現地ガイドから受け取っていた、ティペットとマーカーラインで仕掛けを作成して、明日からの偵察釣行に備えます。

明けて、ガイド兼インストラクターのテレサとご対面。彼女はチェコチームの秘蔵っ子。背が高くスマートな美人です。大会のスケジュール冊子の表紙にもなっています。
ガイド時の写真です。



どうです？・・・この優雅なフィッシングスタイル。
これぞ、チェコニンフ。
ヨーロッパユースで並み居るフィッシャーマンをなぎ倒し上位入賞を果たした実力の持ち主で、歳は若くとも、5 歳から鍛え上げての釣り経験は豊富。将来、世界チャンピオンに名を連ねるかも知れません。
ロッドのかざし方をみてください。目の高さに持ち上げた腕と、30 度に掲げたロッドから出たラインは、当たりが出るのを検知するのに最適なポーズです。（因みに、日本の清流では魚の動きで当たりを検知したりもしますが、ヨーロッパの水は茶色の烏龍茶のようで、魚影が確認しづらい。）

さーて！！彼女が運転する小型車に乗って出かけます。先ずは、会場となるダム湖を偵察。本来の川筋の流れに沿った右岸が狙い目とか。
次はこのダムの下流に位置するストリームへ。道路から線路を跨いで、たどり着いた流れは、川幅 20m ほどで、大きな岩が点在する山岳渓流風ですが、先ほどのダムの下流になり、水の色はダムと同じ烏龍茶。ここは、競技会場ですから、フィシング可能域へと移動しますが、そこにはすでに各国の選手が入り、混雑しています。
結局、ホテルの対岸からの実釣になりました。
水の色もあるけど、あまり綺麗な川には見えません。鱒は居るのかしら？と半信半疑です。
堰堤下へとテレサに導かれ、瀬の中へ小型のテレサニンフとドロッパーにスカッドニンフを結んだ仕掛けを指示どおり投げ入れると、早速手応えが有り、合わせたロッドがしなります。大きな手応えにテレサも「リアリー？」って。40cm 程の虹鱒です。

流心から外して、外側を流すようにとの指示です。「はい」仰せのままに素直に従います。一歩ずつ下流に下がりながら探りを入れます。5m ほど下がった所で大きな当たりです。上がってきたのは 50cm オーバーの虹鱒。使用したのはいずれも日本からテレサに特注していたニンフです（これを私はテレサニンフと命名）。すかさずテレサが寄って来て大喜びです。
その後は中洲を挟んだ反対の流れで初のグレーリングをキャッチ。ヒットフライはグリーンのスカッド。グレーリングはやっぱりスカッドって程釣ってないけど、やっぱりスカッド。

これでここは切り上げ、次の場所へと移動します。
陸っぱりのポンドで偵察後に試し釣り。なんと、大会会場での実釣です。
この大会では何箇所かで同じような状況がありました。本来なら大会場所での練習は禁止されているのですが、今回は様子が違います。ここはチェコニンフの本場です。各国から注目され、特にヨーロッパの強豪国には調べ尽くされているので、今更隠しておく必要も無いということでしょうか？
テレサも一緒に竿を出し、順調に釣り上げていきますが、私にはなかなか釣れません。見かねたテレサが近づいてきた瞬間にヒット。どうやら、彼女は釣りの女神。彼女が側に居るだけで釣れるのです。

昼食後に再び、午前中のブルタバ川下流の橋の下から入ります。
対岸には行軍演習中の兵士が水分補給で腰を下ろしています。よし！景気づけに「良いとこみせてやろー」って気合いが入ります。こんな時ってだめですね。
ようやく、テンカラ 逆さ毛鉤でブラウントラウトを手にした時には、行軍兵士の姿は無く、夕闇が迫り、丘に上がると、ベルギーチームがリーバーサイドでバーベキューをしています。彼等はいつでもこうやってキャンピングカーでやってきては練習しているのでしょうね。ヨーロッパ中がホーム.リバーって訳ですね。

テレサには一日限りのガイドをお願いしていましたから、ガイドとしてはこれでお別れです。
因みに、彼女は審判団の指導的役割のセクタージャッジも担っていますから、大会中は毎日目撃することになりました。

2 日目は、かつて、チェコチームに所属していたサイモンのガイドです。
彼のチェコニンフ・システムとロッドの紹介です。
彼が示したシステムは直径 0. 5mm のナイロンラインをフライラインの先にリーダーとして 6m 程つけて、黄色と赤のマーカーライン、その先に 3 本のフライをつける仕掛けです。これだと少なくとも 50cm ずつ離して取り付けるフライは 2m 程でトータル 8m 強になります。
新しい規則ではロッド長の 2 倍までとの規定になりましたので、彼が貸してくれた、10ft6in のロッドでは、規則違反になります。本来なら、そこに登場するのが、0. 53mm のチェコニンフ専用フライラインです。これは量産品として市場に出ているので規則違反にはなりません。
いづれにしても昨日のテレサのシステムに比べて一昔前のチェコニンフ・システムになるのでしょうね。
一口にチェコ ニンフとは言うけれど、発展途上のシステムです。日々進化しているし、選手によっても色とりどりです。大会規則も頻繁に改正され、大会では規則に則って、システムを構築する必要があります。

チェコ ニンフに関係するであろう世界大会規則をご紹介すると、

21 条 1 項 ロッドの長さは 12ft もしくは 366cm 以下 。
27 条 1 項、2 項 競技用フライラインは、量産品で、最短 22m の長さが必要となり、太さは 0.53mm 以上。
27 条 3 項 シューティングヘッドは認められない。
27 条 4 項 沈める、もしくは浮かせる材料をフライラインに追加することはできない。
28 条 1 項 ティペットを含むリーダーは、使っているロッドの 2 倍の長さまで使うことができる。
28 条 2 項 リーダーは 、結び目が有って も無くても、連続的に先細り、もしくは同一の太さであること。
28 条 3 項 沈める、もしくは浮かせる材料をリーダーに加えることができない。ガン玉の禁止。
29 条 5 項 それぞれのフライが、自由にぶら下げた状態で、それぞれのアイとアイの間が 50cm よりも近付かないという条件で、最大で 3 つのフライが認められる。
29 条 6 項 全てのフライはリーダーに接続する必要があり、フライに結んだり、フライのドロッパーがリーダーの材料に沿ってスライドしたりしてはいけない。
29 条 7 項 全てのフライは、バーブレスのシングルフックに巻く必要があり、タンデムフライは認められない。
29 条 8 項 魚に対し繰り返し過剰な害を引き起こすような、道具、もしくはフライの使用が、コントローラーに よって確認された場合、そのようなフライ、もしくは道具の使用 は、コントローラーによって禁止することができる。
29 条 9 項 フライの中に、魚を引き付けるための化学物質や、発光体の使用は禁止される。
29 条 10 項 フライ元来のコンセプトを変えてしまうところの型で作製したプラスチック、シリコン、ゴムでできたボディは禁止である(ミミズ、 エッグ、生餌、ウジを意図して型で作られた模倣品)。ベンド、シャンクまたはアイを超えるラバーや押し出し丸形状 の材料の利用は禁止である。但し最大 0.53mm までの足の模倣品は例外である。（足の直径は引っ張って伸ばさない状態でゲージにて測定される）

まだまだ、フライ形状など、細かい規則が有りますが、チェコニンフに関連するであろう概略です。日々、規則に則って、練習です。コロナが落ち着いたら、直ぐにでも飛び出せる様に。
尚、規則の紹介には編集者の小松澤誠一さんの翻訳を参考に使わせて頂きました。

ドリフトボートフィッシング

小松澤 誠一

湖での釣りと言えばボートフィッシングが格別です。
湖一面どこでも好きな場所で釣りを楽しむことができますので、オカッパリでは味わえない自由な釣りを楽しむことができます。
特にフライフィッシングでは、バックキャストのためのスペースを簡単に作れるという点でも優位性があります。
レンタルボートの費用と、ボートの予約状況に問題が無ければ、ボートフィッシングを選択しないという手はないでしょう。
もちろん、ボートライセンスの取得、ライフジャケット、魚探、ロッドホルダー、ボートクッションなど、必要となる物が多くなってしまうという部分もあることはありますが。

ボートフィッシングと言えば、以下のような釣り方が一般的ではないかと思われます。

1. アンカーフィッシング：
目的の場所に付いた時点でアンカーを打ち、定位置から周囲を探る方法。

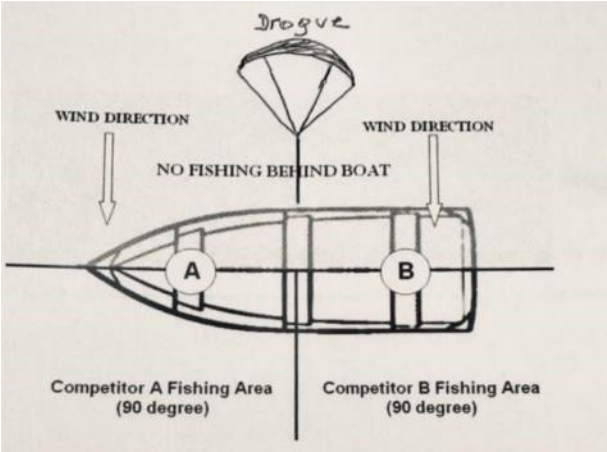
2. トローリング：
ボートを常に走らせ、ラインを長く出した状態で「引き釣り」をする方法。（フライフィッシングのタックルを使う場合は「ハーリング」とも言う。）

3. エレキモーターフィッシング：
電動モーターを使って常にポイントを移動しながら広範囲を探る方法。

もちろん、どの釣り方にも一長一短があり、対象魚の食性、湖の地形、水温、時間帯、釣り人の好みなどによって選択されていると思います。
ここでは、上記のボートフィッシングではなく、日本ではあまり馴染みの無いドリフトボートフィッシングについて紹介させて頂きます。

ヨーロッパではフライフィッシングの競技大会が盛んに行われており、そのような大会ではドリフトボートボートフィッシングによって競技が行われています。
ドリフトボートフィッシングでは、ボートの右舷から直角に風を受けるようにし、風下に向かってドリフト（漂流）させながら釣りをします。
ボートをドリフトさせる理由は、同じ釣り人が、同じ場所を独占し続けないようにするためです。
競技大会では、釣り場に対する公平性にも配慮が求められるわけです。

ドリフトボートの装備について、世界フライフィッシング選手権大会のルールで規定されている図を示します。



まず、ボートの進行方向に向かって右舷真横にドローグ（水中パラシュートのようなもの）を取り付けます。

この時、ドローグの両端から出ているロープは、船主と船尾に取り付けられた環状のガイドに通されます。
ロープはガイドには直接結び付けず、ロープの先端同士を結び合わせます。
つまり、ドローグはループ状になったロープでボートに取り付いていますので、ドローグの位置を前後に移動させられるようになっているわけです。
このように取り付けられる理由は、湖流と風向が違っている場合でも、風下に対して船が直角に流れるようにドローグの向きを調整できるようにするためです。
競技会のルールでは、ドリフトボートフィッシングで釣りができる範囲は、ボートの風下側（左舷側）のみとされています。これは、トローリング防止のためです。
競技会では、釣果だけではなく釣技を競うことも重要視されているため、フライを動かすという行為を釣り人のライン操作以外ではできないようにしているわけです。

スポーツ性を高めた釣り方であるドリフトボートフィッシングですが、決して難しいことばかりではありません。
まずキャストですが、常に風下に向かってキャストをするため、キャストの技術が低くても、比較的簡単に距離を出すことができ、広範囲に釣りを楽しむことができます。
常に同じ向きを向いていられるという点でも、フライラインのメンディング操作などの手間を軽減させてくれます。
風によっての移動しながらの釣りとなるので、流し方のコツさえ掴んでしまえば、一回のドリフトでかなりの距離を自然の力だけで探ることができ、とても省エネでエコです。
オールやエンジンを使わずに移動できるという点でも、魚へのプレッシャーも最小限に抑えられ、湖底の砂や泥を巻き上げることもないので、自然に優しい釣りができます。
2 人乗りで釣りをする場合も、船首と船尾に分かれて座り、2 人とも同じ方向を向いてキャストをするので、互いのキャスティングでラインをクロスさせることもなくなり、トラブル軽減にも繋がります。
注意が必要な点としましては、風が強いときに船が岸に近付き過ぎて座礁しないようにすることと、他のボートとの距離が近くなり過ぎないように気を配ることくらいでしょうか。

これまで説明してきたようなドリフトボートフィッシングは日本ではマイナーな釣り方なので、このような釣り方をするためのドローグは市販されていませんし、ボートにもドローグを取り付けるためのガイドも付いていません。
つまり、日本でこの釣りをするためには、ドローグやガイドを自作するしかないのが現状です。
これは、ブルーシートを利用して自作したドローグの写真です。

ドリフトボートフィッシングが日本で普及しない理由を想像してみますと、「ボートを使ったフライフィッシングの競技大会が殆ど無いため、このような釣り方をする必要がない。」ということだと思います。
しかしながら、実際にこの方法で釣りをやってみると非常に効果的で興味深い釣り方だということが分かります。
このような釣り方が、日本においても一般的に普及し、新たなボートフィッシングスタイルの一つとして確立されれば、釣りの楽しみ方がさらに増えるのではないかと期待しています。

内水面漁場管理委員を務めてみて

石井 利明

漁場管理委員会とは、地方自治法、漁業法によって知事から選任され、知事からの諮問事項に対し答申する機関である。任期は 4 年だ。
私は、漁業者代表として 2 期、8 年勤めた。その経験を振り返ってみる。

私が、任期中に「残念だったなぁ」と思う事は、“もう少し発展的なことが出来れば”という事だ。もう少し具体的に言えば、“漁場≒釣り”の将来につながることをしたかった。例えば、放流だけに頼らない漁場管理とか、基本的に無料で釣りが出来る年齢層に対する釣り講習の実施（無料の疑似ライセンス認証）とか、雑魚が一杯泳ぐ里川の再生（ザコから始める魚釣り）などだ。
2 年前の「漁業法改正に思う釣り人の覚悟の問題」でも書いたが、“獲る”漁業一本鎗から“育てる”漁業との併用、共存しながら利益を上げる仕組みを作らなければならない。それに対する私なりの提案が上記のものだった。

漁場管理委員会の役割の中には、諮問・答申だけではなく、漁場計画を樹立すべき旨の知事に対する意見具申（漁業法第 11 条第 3 項）というのがある。私が所属した場合で言えば、この“意見具申”という機能が

組織形態・運営を行う構造に委員会がなっていない。裏を返せば、そのような機能を行政が求めていない、という事だ。

微力ながら、委員会では、機会があれば、上記の提案をしてみた。その場では、皆さん、「ウンウン」と言ってくれる。しかし、それでお終いだった。

自分の努力の足りなさを棚に上げて言うが、もう少し、“釣り人”代表の方々との連携を図れれば、状況は変わったかもしれない。委員会にも、採捕者＝釣り人の代表の方々は居るが、あくまでも個人である。組織的なつながりが必要だ。組織としての JOFI は非常に強力な存在である。

そのような構造になれば、自然と、行政との繋がりも出来る。目標は、多くの人たちが賛同できる“漁場計画”を作る事だ。多くの賛同を得るためには、釣り人の“エゴ”は通用しない。釣り人も変わらなければならない。

最終的には、漁場≒自然資源管理が職業として認められ成立する事だと、私は考える。

期待する釣りインストラクター像

会長　鈴木 伸一

2020 年度釣りインストラクター講習の際、資格を取得した暁には以下のような釣りインストラクターになってほしい旨、受講生にお伝えした。

(1) 時代に即した活動ができる釣りインストラクター
(2) 情報共有、情報発信のできる釣りインストラクター

先ずは、募集要項から釣りインストラクター制度が創設された当初の時代的背景を再認識してみたいと思う。

『1. 公認釣りインストラクター制度の実施主体である一般社団法人全日本釣り団体協議会（以下「全釣り協」という）は、農林水産省を主務官庁として、昭和 46 年に発足。釣りの健全な発展と漁場利用問題の解決、漁業関係法規の周知、自然環境の保全、水産資源の保護等を目的として全国的に活動を続けている。各都道府県釣り団体協議会と、それぞれの釣りを専門とする広域団体によって構成され、我が国唯一の公認された全国規模の釣り人団体である。』

そのころは、釣り具といえば街の釣り道具屋から購入するのが当たり前で、釣りのマナーは釣り道具屋の店主から教わることが多かった。そして、釣り道具屋に来る客は長居するものが多く、釣りに関した様々な情報共有の場でもあった。また、釣り人はそれぞれ自分に適した釣りクラブに属すものが多く（そのころはインターネットのような便利な通信手段は流通しておらず、最新情報を得るためには釣りクラブに属すことが必要であった）、釣りクラブはその釣りクラブの専門分野に応じた連盟に属しているのが一般的であった。

たとえば、私はフライフィッシングをメインに活動していたので、所属している釣りクラブは Japan Fly Casting Club、Japan Fly Casting Club が属している連盟は日本疑似餌釣連盟であるように。そのため、アナログの時代であったにも関わらず、トップダウン、ボトムアップでの情報伝達はそれなりにできていた。

『2. 平成元年 5 月 30 日、「全釣り協」第 19 回通常総会において「全釣り協」公認釣り指導員制度の創設にむけて小委員会発足を決議。平成 2 年 5 月 29 日、第 20 回通常総会において、創立 20 周年記念事業の一環として上記制度の確立を決定。以後諸官庁、関係団体との協議をすすめながら、制度策定を推進してきた。』

ちょうどバブルが弾けたころで、またインターネットが流通し始めたころでもあった。また、若者がテレビゲームに夢中になった時期であり、若者のインドア志向が強まってゆく時期でもあった。

『3. 平成 4 年度から、上記指導員制度を、公認釣りインストラクター制度と名称を改めた。その後実施要綱、受験資格、公認釣りインストラクター検定基準、研修規定等を定め、正式に農林水産省の指導のもとに発足した。』

『4. 平成 9 年度から公認フィッシングマスター制度が新設された。その目的は、現行の公認釣りインストラクターに対し、「活動全般の指導」と「資源の保護、環境の保全」に関する情報等を提供し、公認釣りインストラクターを通じて広く釣り人に周知徹底を図ることとしている。』

そのころから現在に至る間、釣り具に関してはフロロカーボン・ライン、PE ライン、高弾性カーボングラファイト・ロッド、一つテンヤ、タイラバ、・・・・・の出現と目まぐるしい進化を遂げた。しかしながら、釣り人予備軍のインドア志向も進む一方で、釣り人口も大幅に減少してしまうこととなった。また、紙ベースであった情報発信に関しても、今ではインターネットが主流となり、欲しい情報はインターネットを介して世界中から瞬時にして取得可能となり、釣り人のクラブ離れも加速するなど、釣りをとりまく環境は大きく変化してきた。

そして、今年は渓流釣りの解禁早々コロナ禍に陥り、仕事の多くはテレワーク化も進み、人々のライフスタイルも随分と様変わりした。このような状況下、（今までのようなリアルな）釣り指導は 3 密を避けられないので「コロナ禍では何もできない」では釣りインストラクターの将来はないと思う。

残念ながら、JOFI 東京においても、未だどのように活動すべきか模索中である。しかしながら、少なくとも役員会はZOOMなどを利用したオンライン化が必須と考える。また、会員相互（今後は他の釣りインストラクター連絡機構を含め）の連絡にしても、現状ではメール、紙が中心となっているが、Facebook、LINE など皆さんがアクセスし易いSNSの活用、ホームページとSNSの連携など時代に即した整備が必要と思っている（この辺の技術やセンスは若い会員のパワーをお借りしたい）。

さらに、いくら意義のある活動をしていても情報発信ができないのであれば、当事者以外その活動を知ることができない。また、他人から釣りインストラクターが評価されることもないであろう。

2019 年度、遅ればせながらホームページをスマホ対応とさせた。名刺やパンフレットなどに QR コード（ホームページのリンク・アドレス）を載せることにより、一般の方にもその場で JOFI 東京ホームページの閲覧が可能となり、様々なイベントで活用できるようになった。また、これからは動画が一番効果的な情報提供手段と考え、2020 年度からはホームページに動画（膨張式ライフジャケットの動作確認、ヤマメ発眼卵放流の様子）も一部取り入れ、釣りインストラクター・マスター研修会や釣りインストラクター講習の際に利用したところ評判も上々であった。釣りインストラクターは、個人ではなく、組織として活動するものである。今後も、情報共有、情報発信には力を入れていきたい。

JOFI 東京ではコロナ禍を一つのチャンスと捉え、今後も時代に即した活動の場を増やすべくアンテナを広げていくつもりである。ぜひ、皆様のご協力をよろしくお願いします。

2020 年度活動実績

日付	活動実績
6/14（土）	若洲シーサイドパークグループ・（公財）日釣振東京都支部主催 第 16 回「親子釣り教室」 （釣り指導・サポート） ※外出自粛要請により中止
8/22（日）	アウトドアフィッシングスクール in 若洲 （安全な釣り指導、魚の捌き方指導 等） ※COVID-19 感染拡大防止対応により中止
11/7（土）	ヤマメ発眼卵 BOX 埋設 （JOFI 西東京に協力参加）
11/14・15 （土・日）	2020 年度全釣り協公認釣りインストラクター資格講習・試験 （講師・スタッフを派遣）
1/22～1/24 （金・土・日）	釣りフェスティバル 2021 （オンラインによる情報提供にて参加）
毎月第 2 土曜日	若洲海浜公園釣り場における釣り場クリーンアップ、及び釣り指導

編集後記

今年度は、世界的な新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大とその対策に翻弄され、多くのイベントが中止を余儀なくされました。
未だ終息の目処が立たない状況が続いておりますが、7 月には東京オリンピックの開催も控えておりますので、引き続き、一人一人に感染拡大の防止を意識して頂き、安心した生活が送れるように協力し合っていきましょう。

一方、九州地方では、2019 年に引き続き、2020 年にも集中豪雨による甚大な河川災害が発生しました。
大雨による河川氾濫は、もはやどこの地域でも起こり得る可能性があることを念頭に置き、釣り人としても十分な安全対策を講じた上での釣行計画を立てて頂けますようお願い申し上げます。

今回の会報も昨年同様、特にテーマを決めずに執筆者の自由なテーマで原稿作成をお願いしました。
JOFI 東京としての活動も少なく、また、ご自身のフィッシングライフにも満足がいかない状況でのテーマ捻出になったのではないかと思います。
執筆者の皆様、会報発行にご協力頂きまして有難うございました。

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て、適宜特集を組んで発行していきたいと思っています。
原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照し広報部宛に E メールや郵送などでお寄せ下さい。
原稿の集まり具合によっては期限を設けて執筆依頼をすることもありますので、その際はご協力をお願い致します。（広報部）

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌
第 9 号

発効日　2021 年（令和 3 年）1 月 8 日

発行　　JOFI 東京
（一社）全日本釣り団体協議会　公認
東京都釣りインストラクター連絡機構

編集　　同上（広報部）

URL　　https://jofi-tokyo.org/